

---

# 花弁をつかむ

幸谷遙

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

花弁をつかも

### 【Zマーク】

Z2906B

### 【作者名】

幸谷遙

### 【あらすじ】

使いの旅とその課程にて。冬の山中、道をつたがう男が思ひつこと。

そこは遠く、遙か彼方で雪とともにある寒い国。広がる山脈地帯の最奥に、その国はあるという。

どうかお願ひそこへ行つてきて、と馬鹿な女が言つものだから、しがない仕え人である俺は渋々だろうが承知して行つてやらねばならんのだ。

といふうに俺は南方に旅立つた。国元を旅立つて十日。人の住まない山地に入り込んで早五日。食糧も水も底を尽く寸前。馬鹿女めと不敬とも言える悪態を吐く。

そこは馬鹿女の生まれ故郷。幼くして故郷を後にした女が現在の栄華を両親に伝えてと、使いに出された今回のみちゆき。

氣の進むのか。悪路悪路ひたすら悪路。いくらたっぷり路銀を貰つても遣い所がないんじや意味がない。

戦禍やら飢饉やらでこの辺りは昔に破綻しているのだ。傷んだ街道を修繕する者もない。

馬鹿女め。お前の故郷とて無事なものか。下界から隔絶された国であるから無傷だと、そんな噂があてになるものか。

ああそして山。白い山。南方といえど高地となれば風は冷たい。残雪を踏む。ここは冬の国。

吸う空気が痛い。振り返れば自分がどれほどの高みにいるか知れるだろう。しかし俺は上方を、更なる上を。指名を果たすために。坂の上から岩が転がり落ちてくる。たいした大きさではないけれ

ど、傾斜がきつくなつていつている。

乗つて来た馬は、一昨日殺した。転んで脚の骨を折ったのだ。幸い俺は馬に乗つていなかつたが荷物の運び手がいなくなつた。

しかし遅かれ早かれ馬を捨てる羽目になることなどわかつてゐた。でも少しばかりの落胆が後に引く。

殺した馬は今頃狼の餌になつてゐるだろうか。

黙々と歩み続けるうち不意に彩りが目にに入った。

それは風に舞う幾枚かの花弁であつた。ひらひら、ひらひらと薄紅色の花びらが落ちてくる。

立ち止まり手を伸ばして花弁を一枚。手の平に乗せたそれを見る。ああ、これはサザンカだ。

南方の冬に咲く花。自生するものの花弁は白く、薄紅は人の作り出したもの。馬鹿女の庭に植えられたあの木と同じ薄紅のサザンカ。あれはたしかに故郷を持つて來たと言つた。

それでは俺の目的地もこの先にあるのか。

期待が頭をよぎり道を行く。行きながらまた風に流れていく花弁が見えた。枚数が増えしていく。

彩りに乏しい針葉樹がぽつぽつと生える山の中、あの花の色が鮮やかに映える。

息を吸つた。体が温まつてもつ空気が肺に突き刺さるような感覚は消えた。

目指すのは冬の国。山茶花の国。馬鹿な女の願いを叶えるため。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2906b/>

---

花弁をつかむ

2010年10月20日13時36分発行